

相互動画撮影による「弾き歌いテスト」の試み

野口美乃里

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(令和6年1月10日受理)

Trial of Playing and Singing Test by Mutual Video Recording

Minori NOGUCHI

(Department of Early Childhood Education and Care Nishikyusyu University, Junior College)

(Accepted January 10, 2024)

Abstract

The purpose of this study is to compare and examine two methods of testing "singing with simple accompaniment," and to study the advantages, disadvantages, and points for improvement of the new method. One is the conventional method, in which teachers check each student's performance, and the other is a method in which students evaluate video recordings made in group work and submitted by the students. The study was based on the results of a test administered to 63 students taking "Early Childhood and Musical Expression" and a questionnaire administered after the test.

Key words: 弾き歌い:playing and singing
簡易伴奏:singing with simple accompaniment
相互動画撮影:mutual video recording

1. 研究の背景

1) 「弾き歌い」能力養成の必要性

幼児の園生活は登園後の「朝の歌」に始まり、昼食時には「おべんとうのうた」降園時の「おかえりのうた」等の生活のうたや季節の歌等と共にある。歌うことは、幼児にとって最も身近な音楽表現であり、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において、保育内容「表現」の「ねらい」にあるように「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」¹⁾ ことのできる、幼児の心身の発達に必要不可欠なものである。その歌唱活動をより豊かにするために必須となるのが保育者の歌唱とピアノ伴奏のスキルであることは言うまでもない。保育・教育実習においてもそれに先立つオリエンテーションで、弾き歌いのための課題曲を複数曲課され、実習開始までに弾き歌いできる状態にしておくことが求められる等、保育学生にとって、弾き歌いは避けては通ることのできない課題となっている。しかし近年、保育者養成校入学生においてピアノ学習経験者の割合は減少傾向であり、本学学生においても R5 年度入学生の入学直後のアンケートで 51% がピアノ未経験者であった。

本学では 1 年次 6 月と 11 月に附属幼稚園での実習が設定されており、そのどちらにも弾き歌いが課されている。6 月の実習では昼食時の「おべんとうのうた」降園時の「おかえりのうた」が課題だが、先述の通り、ピアノを学び始めて 2 ヶ月ほどの学生がその課題をこなすのは容易ではないことを考慮し、その目的は主に「子どもの前で弾き歌いの体験をする」ことであり、その出来栄が評価の対象とはならない。しかし 11 月の実習では先の 2 曲に加え「季節の歌」(複数曲から 1～2 曲を選択)を弾き歌いすることが課題となり、これは評価対象となる。つまり入学から 11 月までの 7 ヶ月余りで、初心者学生にも、子どもたちの前で弾き歌いをする技術を身に付けさせる必要がある。そのため、1 年次前期に「子どもの表現のためのピアノ伴奏法 I」(以下、ピアノ伴奏法と略す)でピアノ演奏の基礎を学ぶ。この科目は個人レッスン形式で実施され、その中で実習の前期課題である「おべんとうのうた」「おかえりのうた」も取り扱う。「ピアノ伴奏法」は半期科目ではあるが、実際に半期で単位取得に至るのは、入学以前からピアノの経験を積んだ学生(10%程度)に限られ、多くの学生は後期も引き続き履修を継続する。

2) 簡易伴奏を使用した弾き歌い

1 年後期開講の「幼児の音楽表現」では、主に幼児の歌唱活動を中心に、その表現や発達について学ぶ。授業開始が 11 月の実習直前でもあることから、授業の第 2

回から第 4 回の 3 回を使い「簡易伴奏を用いた歌唱活動の伴奏法」のテーマで ML 教室を使用し、秋のうたの弾き歌いを扱っている。「ピアノ伴奏法」授業がピアノ演奏技術の向上を軸にしているのに対し、ここでは、歌唱活動の意義について学びながら、歌詞や旋律を、明瞭さや表現力をもって幼児の歌をリードする歌唱力に加えて、それに合わせて伴奏を弾くこと、弾きながら歌い始める合図をタイミングよくかけること等も課題となる。初心者学生にとってこれは困難な課題ではあるが、それを比較的取組み易いものにしてくれるのが「簡易伴奏」である。「簡易伴奏」とは、ごく限られた和音のみを使用する伴奏法である。武藤他(2019)が「簡易伴奏スタイルは即戦力となる人材を育成するにあたり、積極的に導入していくことが重要である」²⁾と述べているように、調性と和音記号の関係を理解することにより簡易に伴奏を弾くことができるため、初心者学生にとって大変有効であるだけでなく、オリジナルの伴奏にも対応可能なピアノ経験学生も、簡易伴奏を習得することで短期間により多くのレパートリーをつくるのが可能となる。1 年次前期開講の「音楽の基礎」で既習した調性の知識に基づき、本授業ではハ長調、ト長調、ヘ長調、ニ長調の 4 つの調の主要三和音について学習した後、実際に鍵盤上で連続して和音を鳴らしながら、指示された和音記号の和音を瞬時に鍵盤上で掴むことができるまで繰り返し練習し体得する。その上で 11 月実習の課題「大きな栗の木の下で」「どんぐりころころ」などの「秋のうた」のレパートリーを複数曲つくること目標とし、学生が自信をもって実習に臨めるよう単元の最後にテストを実施している。

2. 研究の目的

弾き歌いのテストは、教員が学生一名ずつその演奏を聴き、出来栄を評価する方法が一般的であり、実際筆者も以前は、ピアノの個室で学生の弾き歌い演奏を一名ずつチェックし、その間他の学生にはテストの練習や他の課題に取り組みさせる方法を取っていた。この方法のメリットは教員が一人ひとりの学生のパフォーマンスをしっかりと観察して評価することができる点である。しかし一方で、学生数が多ければそれだけ時間がかかり、授業時間内に全員の演奏をチェックする必要があるため、学生一人にかけることのできる時間が限られる。そのため学生にとっては失敗のできない一発勝負の本番となり、非常に緊張を伴うテストとなる。緊張で思わぬ失敗の演奏となっても弾き直しをさせる時間も取れず、学生にとっては「弾けなかった」という苦い経験として残り、実習前にテストを課す本来の目的である「自信をつける」とは逆の結果となることもある。加えてこの方法では、

学生が他人のパフォーマンスを観察することができないこともデメリットと考える。そこで、それらを改善するため、3～4人のグループ毎に、先生役・子ども役・撮影役と役割分担し、ピアノ個室内で先生役の演奏を動画撮影して提出する方法を試みた。この方法であればタイムコストが縮小されることはもとより、演奏が失敗した場合は撮り直しもでき緊張感が軽減されるのではないかと。加えて他人のパフォーマンスを観察することで何かを学び取り、自身の演奏に取り入れ、より良いパフォーマンスに繋がるのではないかと考えた。

この方法について考察するため、テスト翌週、授業内において Microsoft Forms を用いたアンケート調査を実施した。

本稿では、主にアンケート結果をもとに本テスト方法のメリットとデメリット、改善点等について検討する。

3. 方法

1) 研究対象

対象は、幼児保育学科1年生の「幼児と音楽表現」履修者 A クラス 33 名および B クラス 33 名合計 66 名中、第 4 回授業に出席した 63 名である。但し、その内 2 名が翌週の授業を欠席したため、アンケート調査に回答したのは 61 名である。

弾き歌いテストは第 4 回にあたる令和 5 年 10 月 16 日（月）の 1 限 A クラス、3 限 B クラスの 90 分間の授業の後半の 20 分間で実施し、アンケート調査は第 5 回目にあたる令和 5 年 10 月 23 日（月）1 限 A クラス、3 限 B クラスの冒頭で実施した。また、アンケートにおいて、その結果の研究目的使用についての設問を設け、全員からの同意を得た。

2) テストの方法

表 1 「簡易伴奏による弾き歌いレパートリー」課題曲

	曲名	調性
1	大きな栗の木の下で	ハ長調
2	どんぐりころころ	
3	きくのはな	
4	やきいもグーチーパー	
5	たきび	
6	まつぼっくり	へ長調
7	バスごっこ	
8	幸せなら手をたたこう	ト長調

表 1 の課題曲 8 曲中、学生各自がレベルに合わせ 2 曲を選択し試験曲とする。選択した曲の調性の主要三和音による簡易伴奏を用いて弾き歌い演奏をする。

1 クラスの学生を席次により 1 グループ 3～4 人にグルーピングし、各クラス 9 グループとなった。テストは

授業後半の 20 分間で実施し、グループごとにピアノの個室内で時間内にグループ全員の撮影を終えるように指示した。

以下は当日学生に提示したテストの手順である。

- ①グループ内の 3～4 人の内 1 人が先生役（試験対象者）となります。先生役はマスクを外してください。撮影役は、先生役の口元が見えるように撮影をしてください。
- ②先生役は前奏から弾き始め、子どもの歌いだしの 2 拍前のタイミングで「さんはい！」の合図をかけ、子どもたちが楽しく歌えるように、大きな声で歌をリードします。
- ③途中で間違えても、歌を止めないことが大切です。その場合、数小節の間、片手と歌だけになっても構いません。
- ④撮影役は歌いません。子ども役は、先生役の合図と一緒に歌い、先生役の人が試験を受けやすい環境づくりをお願いします。
- ⑤時間内であれば撮り直しをしても構いません。撮影の順番も問いません。初心者の方も良い弾き歌いができるようグループ内で協力しましょう。
- ⑥授業時間内に提出まで終わるようにしましょう。

3) アンケートの内容

テスト翌週に実施したアンケートの質問項目を表 2 に示す。

表 2 学生アンケートの質問項目

1. 簡易伴奏の弾き歌いテストの方法としてグループワークでの動画撮影する方法、もしくは教員の前で弾き歌いをする方法のどちらが好ましいか
2. 1の回答の理由
3. 他の学生のテストを見ることで参考にしたいと思ったことはあったか。
4. 3の回答について具体的な内容
5. 参考になったことを自身の弾き歌いに取り入れたか
6. 参考にしたことを自身のテスト演奏に取り入れて成功したか
7. 6で「取り入れなかった」と回答した学生に対して「取り入れなかった理由」
8. 本テスト方法(相互に動画撮影しTeams上で提出)の良かった点、悪かった点
9. 本アンケートの結果公表への同意確認

4. 結果および考察

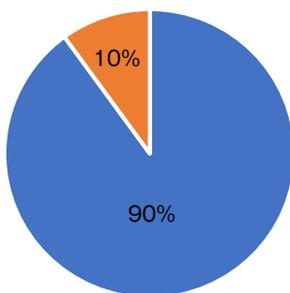
1) 提出動画の評価結果および考察

先述した方法と手順でテストを実施し、授業終了時にはテストを受けた学生全員が Microsoft Teams 上で動画提出まで終了した。提出された動画を全て確認したと

ころ、1名の学生が、2曲提出すべきところを1曲のみの提出となり不合格点となった。しかし、その他の学生は、出来栄に差はあるものの2曲の弾き歌いができており合格となった。動画を採点した印象は、試験対象学生がリラックスした様子で、和やかな雰囲気の中、程よい緊張感をもってテストが進行したことが感じられた。また歌声も思いの外しっかりと発声できており、弾き歌いとしての出来栄も従来のテスト方法時より格段に向上した印象をもった。

2) アンケートの結果および考察

設問1. 弾き歌いテストの方法としてどちらが好ましいか



- グループワークで相互に動画撮影し、Teams上で提出する
- 個室で教員とマンツーマンで弾き歌いをする

図1 弾き歌いテストの方法としてどちらが好ましいか

【設問1】弾き歌いのテスト方法として「グループワークで動画撮影し、Teams上で提出する」および「個室で教員とマンツーマンで弾き歌いをする」のどちらが好ましいと思うかの問いに対して、90%が「グループワークで動画撮影が好ましい」と回答、10%が「教員とマンツーマンでの弾き歌いが好ましい」と回答した。

【設問2】設問1の理由についての自由記述で回答を求めた。

①「グループワークで動画撮影の方法が好ましい」と回答した学生の記述で最も多かったのが「緊張」のワードであり、「プレッシャー」「リラックス」等も次いで多かったため「緊張」に関する記述と「その他の記述」を区別し以下に示す。

●緊張に関する記述

- ・先生と一対一では緊張して成果を発揮できないから
- ・1回では緊張して完璧に弾けないと思うから
- ・一緒に歌ってくれる人がいると緊張が少ない
- ・緊張もするけれど、友達と撮り合うことでリラックスした雰囲気で弾ける
- ・ミスをして一発本番ではないので、少し気持ちが楽に受けられる。

- ・1回勝負だと失敗出来ないという緊張感やプレッシャーで練習では弾けていても本番だとミスをしてしまいそうだから。

全体として教員の前での演奏と、学生同士で演奏を撮影し合う形の緊張感の違いや、撮り直しが許されることへの安心感などに言及したものが多く、従来のテスト方法では、こちらが想像する以上に学生が緊張しプレッシャーを感じる事が窺える。

●その他の記述

- ・実際に子どもたちがいるような感じで、歌に合わせて弾けることが1番練習に良いと思った。
- ・失敗してしまっても、みんなが励ましてくれるから、落ち着いて次成功させよう！という気持ちになれる
- ・グループで協力して、それぞれが良い演奏ができるようにすることができるから
- ・みんなと一緒に弾いたり歌ったりすることで、失敗してもアドバイスもらったり、子供達の前で弾くことを想像しながらピアノを弾けるから
- ・適度な緊張感の中でピアノを弾くことができるし、練習量はみんな同じくらいだから。

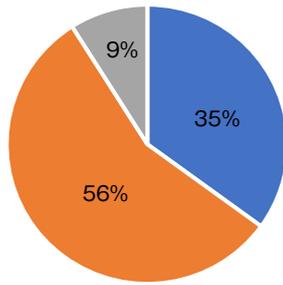
本テスト方法が、「保育現場での実践に近い形」であることや「グループ内で協力し合いながらテストを進めることができる」ことの良さ、「練習時間の平等性」、「経験者からアドバイスをもらえる点」などに関する記述がみられ、学生が本テスト方法を肯定的に捉え、その方法の中で前向きにテストに取り組もうとする姿が窺える。

②「教員とマンツーマンでのテストが好ましい」と回答した10%の学生の自由記述の主なものを下記に示す。

- ・個人的にカメラが回っている方が緊張するから。
- ・弾き直せると思ってしまうので全力を注げないから。
- ・グループだと後ろからの視線が気になり、気が散ってしまうから
- ・子供の前では何度もやり直したりするわけではないから

「教員とマンツーマンでのテストが好ましい」と回答したのは10%と少数であったが、他の学生の視線や撮影することへの緊張についての記述がみられた。また、「グループワークで動画撮影が望ましい」と回答した学生の記述に「実践に近い」というものがあつたが、ここでは別の視点で「弾きなおしできることが実践的でない」という意見がみられた。

設問3. 他の学生の弾き歌いを参考に、自分の演奏に取り入れたいと思ったことがあったか



■ とてもあった ■ 少しあった ■ なかった

図2 他学生の演奏から参考にしたいことがあったか

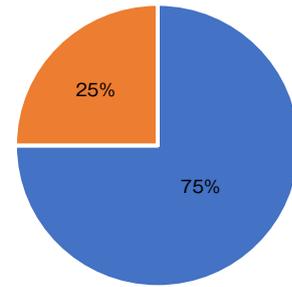
【設問3】「他の学生の弾き歌いを参考に、自分の演奏に取り入れたいと思ったことがあったか」の回答は、「とてもあった」が35%、「少しあった」が56%、「なかった」が9%で、91%の学生が他人の演奏を聴き、何らかの参考にしたいことがあったと回答した。

【設問4】設問3で「とてもあった」「少しあった」の回答者に具体的な内容について尋ねたところ、多様な回答がみられた。学生の記述の主なものを下記に示す。

- ・歌いだしの合図をかけるタイミング
- ・合図の声をかける前に歌う人の顔を見て息を合わせていた。
- ・体を揺らしながら弾く(リズムにのる)
- ・声がしっかり出ていた点
- ・子どもの顔と楽譜を交互に見ながら歌うことができている人がいて自分もできるようになりたいと思った。
- ・ピアノを弾くスピードや指遣いなど。
- ・曲の速さがみんなちがったから歌いやすい速さを知ることができた。
- ・間違えた時の対応の仕方を学べた
- ・客観的に見て自分に足りないところが分かり、歌い方や速さなど参考になった。
- ・ピアノを弾く前の子どもへの声のかけ方
- ・子ども達が歌うことを想像しながら、ゆっくりなテンポで弾くこと。
- ・歌い声が柔らかかったり、声が大きく明るかったり、保育者としてすごくいい声だったので取り入れたいと思った。

この回答からは、お互いのテストの場に関わることで、他の学生の演奏から実に様々なことを学んでいることが窺える。テストという緊張感のある限られた時間であるからこそ、しっかりと他人の演奏にも注意を向け、自身の演奏に生かそうという心理が働いたと考えられる。

設問5. 参考になったことを実際に自分のテストに取り入れたか

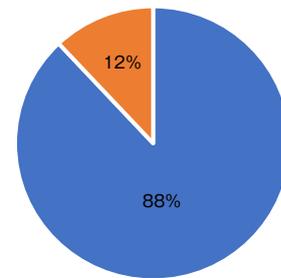


■ 取り入れた ■ 取り入れなかった

図3 参考になったことを実際に自分のテストに取り入れたか

【設問5】設問3で「とてもあった」「少しあった」に回答した学生に対し、「取り入れたい」と思ったことを実際に自分の演奏に取り入れたかを尋ねたところ、「取り入れた」が75%「取り入れなかった」が25%であった。

設問6. 参考にしたことを上手く取り入れて弾き歌いができたか



■ できた ■ できなかった

図4 参考にしたことを上手く取り入れて弾き歌いができたか

【設問6】設問5で「取り入れた」と回答した学生に「参考にしたことを上手く取り入れて弾き歌いができたか」を問い、その回答は「できた」が88%、「できなかった」が12%であった。

20分間という短い時間の中でも、他人の演奏から学んだことを、即座に自分の弾き歌いテストに生かすことができた学生が88%であることは、「弾きなおし」が認められていることの利点である。また「取り入れた」ことの一つ一つは、気が付きさえすれば割と簡単に取り入れられることであり、それが、4-1)の「提出動画の評価結果および考察」で先述した「弾き歌いとしての出来栄も従来のテスト方法時より格段に向上した印象をもった」こととも関連があると考えられる。

【設問7】設問6で「できなかった」と回答した学生にその理由について自由記述で回答を求めた。学生の記述の主なものを下記に示す。

- ・余裕がなかった。
- ・今まで練習していたことが癖づいていたから。
- ・自分の方が先に弾いてしまっていたので取り入れ

- ・ることができなかった
- ・緊張で、弾くことと歌うことで必死だった

この記述からは、他人の演奏の良いところを「取り入れたい」と思いつつも演奏順の都合で不可能である場合や、即座の対応が難しかった学生がいたことが解る。

【設問8】今回のテスト方法について「良かった点・悪かった点」について自由記述で回答を求めた。

●良かった点

- ・自分で1度弾いたものを動画で見られるところが良かった
- ・他の学生もみることもできたところがいちばん良かったと思います。
- ・緊張せず明るい雰囲気での撮影ができた。
- ・やり直しができる所やグループの人と協力して上手く弾けるように演奏できる所はすごくいいなと思った。
- ・みんな平等にできたことが良かった。
- ・弾き終わったあとの拍手や声掛けがあり、とても嬉しかった
- ・他の人の弾き歌いに合わせて、子どもの気持ちになって一緒に歌うことが楽しかった
- ・撮り直しができるし、友達と楽しみながらテストを受けることが出来た。
- ・友達がアドバイスしてくれた。
- ・子ども役の人がいたので弾く人も恥ずかしがらずに歌うことができる点が良かった。
- ・よかった点はお互いに教えることができたり、弾くときの改善点などを聞くことができたり、感想などを伝えあったりできる。
- ・1対1よりもリラックスして弾ける
- ・間違えても大丈夫、もう1回しようという言葉掛けがあり、緊張せずに行うことができました。

●悪かった点

- ・子ども達の前で、歌いながら1発で弾く雰囲気や緊張感には欠けた
- ・他の人に演奏を見られたくないとか聞かれないとかいう人には辛い空間なのではないかなと感じた。
- ・少し話が脱線したり、苦手な人が多いグループだったので時間が足りなかった。
- ・時間が迫ってくると、他の人に遠慮してやり直しをしにくい

多くの学生が記述している通り、子ども役を配し一緒

に歌う存在がいることで、先生役（試験対象者）の緊張感が和らぎ、程よい緊張感の中で互いに励ましあいながら和やかにテストが進行しているのは、従来の方法と大きな差である。また、撮影した動画で自身の演奏を振り返り、課題を見出し、それを次の演奏に生かすことができるのもこの方法の利点であると考えられる。

一方で「悪かった点」の記述で、新テスト方法に「緊張感が足りない」との記述があったが、これは、短大入学前からピアノ経験が豊富にある学生からの意見であった。多くの学生が最低基準（ハ長調）の課題曲に取組んだのに対し、この学生は、ハ長調、ニ長調の曲にも挑戦し、レパートリーづくりに励んだ上で「緊張の中でも完璧に弾き歌いする」ことを課題としていることが窺える。また、「人の視線が気になる」学生への配慮の必要性やグループングにおいて、ピアノ経験者と初心者の割合を考慮する必要があること、演奏順についても「経験者から」とすることで初心者学生の気づきにも繋がると考えられる。

5.まとめ

「幼児と音楽表現」授業における「簡易伴奏による弾きうたい」のテスト方法は、教員が授業中に学生一名ずつの演奏をチェックし出来栄を評価する方法が一般的である。この方法のメリットは教員が一人一人のパフォーマンスをしっかりと観察し評価できる点である。しかし、一人ずつチェックするには時間がかかり、一人当たりの時間は短くなる。学生がミスをしたり、演奏途中で止まってしまうことがあっても、そこでアドバイスをしたり、弾きなおしをさせる時間を取ることが難しい。そのため、弾き歌いする学生のピアノを弾く手や歌声が震えるなど、非常に緊張感を伴うテストとなり、実習直前に学生に自信を付けさせたいという授業担当者の思いとは裏腹な結果を招くこともあった。また学生同士がお互いのパフォーマンスを観察できないこともデメリットであると考えた。そこで改善策として3～4名のグループワークで先生役（試験対象者）、子ども役、撮影役の役割分担で動画撮影し、それを提出、評価する方法でテストを実施した。また、本テスト方法に関するアンケート調査を実施し、アンケート結果を基に本テスト方法のメリット、デメリット、改善点について検討した。

アンケート結果からは、多数の学生が新テスト方法を肯定的に捉え、お互いのテストに関わることで、他人のパフォーマンスをしっかりと観察し、それを自身の演奏に取り入れようとしたことが判った。また、20分間という短い時間の中であっても、他人の演奏から学んだことを即座に自分の演奏に取り入れ「上手くできた」と感じた学生も多く、それらは学生が気づきさえすれば、割と

簡単に取り入れることができ、演奏を一段レベルアップすることができるものであることや、それは弾きなおしが許されるからこそそのメリットであることが確認できた。

一方で、「教員とマンツーマンでの弾き歌いテストが好ましい」と回答した 10%の学生が記述した理由には、「もっと緊張感のあるテストをすべき」といったピアノ経験者からの意見と「人の視線が気になる」などの対人不安的なもの 2 種類の傾向がみられた。また、他人のパフォーマンスから学んだことを上手く取り入れることができなかった学生の記述にあった「グループが初心者ばかりだった」「上手い人より自分が先に弾いた」等からも、今後グルーピングや演奏順についての配慮が必要であることが確認できた。

実技のテストにおいては、長年、リアルタイムで一人ひとりチェックし評価する方法を取ってきたが、新たなテスト方法の試みが、学生に好評であり、評価において特に問題ないことに加えて、学生の出来栄も好結果であったなど、多くの気づきに繋がった。今後も ICT の活用も含め、従来の方法に囚われず、今の学生に合わせた授業方法の改善を図っていきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省・内閣府『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』(2017) (チャイルド本社)
- 2) 武藤純子・大西ゆみ・喜多ちえ・幸野紀子・堀崎峰子・由井敦子・坂井康子「弾き歌いの指導における簡易伴奏の研究 —アンケート調査に基づく簡易伴奏スタイルの分析—」甲南女子大学研究紀要第 55 号人間科学編, 107-118(2019)

参考文献

- 丹羽裕紀子「保育士養成校における弾き歌い段階的伴奏法」(バイエル教則本の利点を用いた練習) 日本教材学会 教材学研究第 32 巻, 43-52(2021)
- 深見友紀子・中平勝子・赤羽美希「携帯端末を使用した演奏映像提出の現状と今後の課題」京都女子大学発達教育学部紀要第 8 号, 97-105 (2012)
- 神原雅之・鈴木恵津子「改定 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育」教育芸術社 (2021)